

巻頭随想

—50周年に想う—

代表取締役社長 酒匂明彦



今年、CACグループ創立50周年の記念すべき年である。お客様はもちろんのこと、ともに支えあってきた仲間たちとご家族に深く感謝申し上げたい。そして、日本にまだソフトウェア産業と言えるものがなかった時代に、逞しい起業家精神で今日の基を築かれた先達に改めて敬意を表したい。これからも立ち止まることなく、新たな歴史を刻んでいきたいと思う。

むろん、半世紀の歩みは順風満帆のときばかりではなかった。会社設立から数年間は赤字が続いたし、1990年代初頭のバブル崩壊の際には、グループ中核のコンピュータ アプリケーションズは大幅な減収に見舞われて赤字決算に陥った。不採算プロジェクトの収束に大勢の社員が苦闘したことは一度ならずあった。私の社長就任からさほど時を経ずして我が国が東日本大震災に見舞われたことも忘れられない。亡くなられた方々のご冥福を祈り、安否不明の方々の無事が一人でも多く確認されることを願いながらも、社会インフラの一部である情報システムを支える企業として、供給責任を果たすことの使命感を強く感じたものだった。

そしていま、IT業界は大きな変革の只中にある。

ひと頃、クラウド、モバイル、ソーシャル、ビッグデータが新潮流と言われたが、前の3つはもはや特別なものではなくなった。IT活用における今日の主要な関心事はIoT、AI、ソーシャル

ロボティクスであり、金融ではFinTechが注目を集めている。ビッグデータはAI、IoTと結びついて応用イメージが膨らんできた。程度の差こそあれ、ユーザーもベンダーも挙ってこれらに取り組んでおり、今日の勝者が明日のそれではない。

顧みて当社はどうであろうか。創業期、CACは日本のソフトウェア産業のパイオニアであり、それもあって業界リーダー格に数えられた。今も独立系大手の一角を占めるし、長年の実績を背景に顧客から高い信頼をお寄せいただいている。ただし、個々の技術、業務分野で見れば、質量ともに当社が一番だと言えるものは少なく、創業期のような存在感を示せていない。CACはこの程度で満足してよい会社ではない。

グローバル企業となった顧客がITをグローバルで考えるとき、必ず頼りにする会社。次世代の潮流となり得る技術が台頭したとき、これにどう取り組んでいるのか是非聞いてみたいと思われる会社。挑戦心溢れる人材が入社を目指す会社。そういう存在となるべく、いま改革に取り組んでいる。次の50年に向けて、時代をリードする新たなサービスと高い社会貢献性で、改めて存在感を高めていかねばならない。後に振り返った時、2016年がその転換点であったと言えるよう、社員諸氏とともに改革に邁進したい。CACは、もっと知的で力強く、創造性あふれる存在になりうると私は信じている。